

夫婦で決めた後悔しない不妊治療のかたち 無精子症で不妊治療を終結した1症例より

○桑原 聖子 佐々木 真紀 羽瀨 さゆき 濱田 亜紀 小柳 良子 園田 桃代

園田桃代ARTクリニック

・諸言

非閉塞性無精子症の顕微鏡下精巣内精子採取術(MD-TESE)の精子採取率は3割程度といわれており、手術にて精子が採取できなかった場合、不妊治療は突然の終結を迎える。

今回非閉塞性無精子症と診断され、精子が採取できずに不妊治療を自分たちの意思決定のもと終結した症例について報告する。

・症例

妻 初診時28歳 既往歴IgA腎症(21歳)
挙児希望
不妊期間2年6か月
月経周期30~35日
妊娠歴なし
不妊治療歴なし
血液ホルモン値
FSH 6.9mIU/ml LH 5.7mIU/ml
E2 47.6pg/ml(月経中)
PRL 33.1ng/ml TSH 0.608μU/ml
AMH 2.39ng/ml
卵管造影未実施

診断名 原発性不妊症

夫 初診時30歳 既往歴なし
精液検査
総精子濃度0万/ml 運動精子濃度0万/ml
血液ホルモン値
FSH 11.1mIU/ml LH 2.6mIU/ml
テストステロン 403ng/dl
PRL 5.9ng/ml
陰嚢水腫なし 停留精巣なし 精巣上体異常なし
精管異常なし
精巣容積 右3.4ml 左2.9ml
精索静脈瘤当院では認めずも、1年半後紹介先で指摘あり、
左精索静脈瘤低位結紮術実施
AZF欠失なし

診断名 非閉塞性無精子症

・経過

～精液検査結果からTESE前までの看護～

0 初診妻のみ来院

(家の都合で来院できず)

担当看護師を決め、情報の開示や手術の選択肢提示、エビデンスに基づいた説明を夫婦共に行い、治療が正しく理解され、納得して治療を受けられる状態にあるか確認。その都度、治療計画を患者夫婦と共有した。また訴えを傾聴し、精神的サポートしながら、不安の軽減に努めた。

6ヶ月 再診結果説明、妻採血

7ヶ月 フーナー(-)
風疹ワクチン接種

(家の都合で来院できず)

1年1ヶ月 再診結果説明
夫の検査再度行うよう説明

1年2ヶ月 精液検査、夫ホルモン採血①

1年3ヶ月 精液検査再検②
当院泌尿器科診察

1年4ヶ月 AZF採血

1年5ヶ月 AZF結果説明③
TESE説明

1年6ヶ月 日程説明、他院紹介④

2年 他院
(手術予定の泌尿器科受診)
左精索静脈瘤低位結紮術施行

2年8ヶ月 再診

2年9ヶ月 静脈瘤手術後精液検査
精子確認できず

再度TESE紹介

3年 MD TESE

3年1ヶ月 結果説明
治療終結

精液検査、夫ホルモン採血①結果説明

一人来院
驚いている様子

学生の時におたふくかぜから髄膜炎にかかったこととあって。影響あるか？

無精子症の原因は不明。再検査で結果が大きく変わる可能性は少ないことを説明。夫に本日の結果を説明できるか確認。再度話しすることも可能と説明。男性不妊外来を受診をすすめた。

患者夫婦が知りたいと思う情報とそれ以外に知っておかなければならない情報を適切に提供し、治療効果に対する現実的な期待と認知がもてるよう説明。

これ以降、常に夫婦二人で来院するようになる。

精液検査再検②結果説明

精液検査所見説明(精子0)
TESE必要。男性不妊外来受診と説明。

夫婦とも淡々と説明をきいていた

男性不妊外来で泌尿器科的診察を受けること、TESE紹介前にAZF検査実施等の今後の治療計画について夫婦に説明する。

理解良好

AZF結果説明③

AZF 欠失なしと説明

ひとまずぼっとしています。

笑顔がみられた
表情おだやか

訴えの傾聴。精子形成やホルモンの関係、非閉塞性無精子症の精子採取率などTESEについてエビデンスに基づいた情報提供、TESE実施までのながれについて説明

TESEや今後のながれについては質問なし。TESE時の痛みが心配。

TESE時の麻酔や、TESE後の生活について、情報提供し不安軽減に努めた。他院での手術になるが、いつでも相談できることを伝えた。

日程説明、他院紹介④後TEL相談

夫婦同席での説明時に質問はなかったが、夫より後日何度か電話あり。担当看護師がその都度対応。抱えている不安や葛藤を傾聴した。

仕事の都合でスケジュール調整が難しいと訴える。

夫婦のペースで治療していけるように日程調整など相談にのった。

後日 他院TESE施設で、身体にメスを入れる事が不安

手術に対する不安の訴えに傾聴し、不安の軽減に努めた。

後日 手術を受けることを決めました。

～TESE後治療終結時の看護～

不妊治療を振り返り、努力した夫婦を労った。

手術は期待せずに望めたと思う。手術中、精子が見つからない事はショックだったが、これまで何度も検査をしてきて精子がなかったのやっぱりと思った。

納得しています。やるだけのことはすべてやりました。これだけやって、いなかったのだから仕方がない。運命だと受け入れるしかない。夫婦で生きていこう決めました。

無精子症で、すぐに手術をして精子がいなかった場合、その後の受け入れが難しいケースもあるが、時間はかかっても、後悔のない選択と治療ができたことを労った。

いろいろな家族のかたちとして、子どもをもたないこと、又もつことを選択肢として養子縁組やAID(非配偶者間人工授精)、出自を知る権利などの情報提供を行った。

今のところ僕たちにとって養子は考えられない。

長い間かかわってもらってありがとうございました。ずっと可能性に縛られて過ごしていましたが、これで不妊治療から解放されます。不妊治療のために仕事を制限していましたが、これからバリバリ働けます。

夫婦ともにこやかに晴々とした表情をしていた。

治療の終結を自主的に見出していったことを労った。

今後相談があれば来院をと相談用紙を渡し、継続サポートできることを説明する。

・考察

無精子症の場合、精子が見つからなければ不妊治療を終結せざるを得なくなる。

この症例は無精子症と診断されてから不妊治療終結にいたるまでの期間が3年1ヶ月であった。

看護師は夫婦との信頼関係を構築するために、十分な説明を行い、訴えを傾聴、思いを表出できるよう援助を行った。

また夫婦が意思決定できるよう支援することで、自分達のペースで不妊治療をすすめることができた。

その結果、夫婦それぞれが気持ちの整理を行い、後悔のない不妊治療終結をむかえることができた。と考える。

治療の終結に立ち会う看護師は、患者の心に寄り添いながら、治療を受けていたことが夫婦にとって必要だったと思えるように支援することが必要である。そして、夫婦の生き方や価値観を尊重したうえで、その人らしい選択を応援する姿勢が重要であると思われる。

今後も無精子症や不妊治療終結を迎える夫婦にとって、後悔のない支援を考えていきたい。



園田桃代ARTクリニック
Assisted Reproductive Technology

第64回日本生殖医学会学術講演会

利益相反状態の開示

私の今回の演題に関連して、開示すべき利益相反状態はありません。

筆頭演者氏名: 桑原 聖子
所属: 園田桃代ARTクリニック